

巻頭言



補綴の本質

The Fundamentals of Prosthodontics

市川 哲雄

日本補綴歯科学会元理事長 (2017~2019)

徳島大学名誉教授

高知大学客員教授

自治医科大学客員研究員

補綴歯科専門医が日本歯科専門医機構で認証され、広告可能な歯科専門医となり大変喜ばしいことになっている。確かに非常に喜ばしい成果であるが、学会のなかでこれに深く関わったものの一人としては確かにそうだと思う反面、90年の歴史を持つ日本補綴歯科学会から見れば、数年の歴史しかない団体の外部評価など些事だと思いたい。90年の、いや学会設立までの期間を加えれば100年の歴史のなかで多くの先人たちが、この学会および補綴というものを磨き上げて来たわけである。

私が歯科補綴学の領域に入って約40年の間に、「接着」や「インプラント」などの登場によって補綴装置の生存率、予後は格段に向上し、口腔関連QoLも著しく改善されたと思う。しかし最も歯列の維持で忘れてはならないのは、デンチャープラークコントロールを含めた口腔衛生の向上であろう。これは平均寿命の延伸により貢献したのが薬剤や治療法より、栄養によるものであることと、ある意味似通っているかもしれない。これからますます歯質欠損や歯の欠損は少なくなり、今までのようなDrillingやFixingをする補綴歯科治療の機会は減少していくであろう。そうであっても、そして「DrillingやFixingがなくなっても補綴は残る」と自分の最終講義で述べたが、補綴の意義が消えることなく、まさにそれこそが真の補綴の本質ではないかと思っている。

私は理事長時代に「補綴の矜持」という言葉を掲げ¹⁾、馬場一美前理事長もこの言葉を使っていた。矜持とは何か、Pride and Responsibilityという英訳を用いたが、そのResponsibilityは、形態(歯列)と口腔機能の維持管理に責任を持つのが補綴であろうと思っている。崩れた歯列を直すだけでなく、崩れる前を察知し、それを事前に食い止めるのも補綴であろう。古谷野潔元理事長は今後の歯科補綴学のあるべき姿をProsthodontic Medicine²⁾という言葉を使い、窪木拓男現理事長も取り上げている。このMedicineというところに、真の補綴歯科の意義があるのだと思っている。このMedicineの部分が補綴の本当の意味が込められており、先人たちが必死になって考えてきたところだろうと思う。そのことを我々が社会に対して十分に説明できなかったことが、補綴歯科専門医がここまで遅れた原因かもしれない。

現在デジタルデンティストリーが急速に進んでいるが、まさしくこれによって補綴が何かと言うことが明らかになることを願っている。単に補綴装置をコンピュータ制御で作ることが本質ではない。生体の機能を評価し、それを補綴装置の形態に適切に反映し、機能と形態を改善する我々がぼんやりとこれが補綴だと思っているプロセス、つまり暗黙知の部分はコンピュータ化によって形式知にならざるを得ないのであって、この部分を明らかにすることが今後歯科補綴学を志すものの使命であると思う。

第一線を退いたものにこのような原稿執筆の機会を与えていただいたことに感謝を申し上げるとともに、ぜひと

も適切な問い (CQ, RQ) と適切な仮説を設定し³⁾, 先人たちの業績と自らの臨床を振り返りながら進んでいた
だき, 口腔機能, 咀嚼の本質⁴⁾ に迫っていただければと思っている。まさにそれこそが我々の学問領域の存在
意義であり, Science for Society, Prosthodontics for Society であろうと思っている。

文 献

- 1) Ichikawa T. JPS drives prosthodontics with pride and responsibility. J Prosthodont Res 2017; 61: 351-2.
- 2) Koyano K. Toward a new era in prosthodontic medicine. J Prosthodont Res 2012; 56: 1-2.
- 3) Ichikawa T, Nagao K, Goto T. Alternative decision-making considerations in prosthodontics. Int J Prosthodont 2012; 25: 260-1.
- 4) 市川哲雄, 後藤崇晴. 咀嚼の質を測る. 顎機能誌 2011; 18: 46-7.